

中世史研究者・本郷恵子氏「旧皇族男子の養子案は女性皇族の“使い捨て”につながる」

【「愛子天皇」の誕生を願う有識者が提言】



中世史研究者の本郷恵子氏（本人提供）

皇室典範の規定を改める女性・女系天皇の容認に踏み込んだ、読売新聞の提言「皇統の安定 現実策を」（5月15日付朝刊）は、大きな注目を集めた。だが、政界では皇位継承に関する与野党協議を担った自民党・麻生太郎最高顧問と立憲民主党の野田佳彦代表の意見が対立、今国会でのとりまとめは見送られた。実現するなら今しかない——「**愛子天皇**」の誕生を願う中世史研究者の本郷恵子氏が緊急提言する。

* * *

前近代、公家や武家の時代から、宮中でも男女の役割は完全に分かれていました。女性も官位はあるが、政治や社会的な役割は男性が担い、**女性は大臣や大納言に就くことはない。内廷で天皇や皇族のケア的な役割**を担っていました。

けれども、**天皇だけは別**でした。**天皇の位は完全に世襲のもので、その血統を受け継ぐ体や生理（体に伴う条件／生身の体）を絶対条件**としていた。**その条件を満たしていれば、女性であっても天皇になることは可能となっていた**のです。前近代において、**天皇は公的な役割であるとともに、公私、内外、表と奥のような壁を越える、あるいは断絶に橋を架けられる存在だった**ことを示しています。

中世史研究者としては、「**天皇は幽玄の境**にいらっしゃって」という歴史書『**愚管抄**』の記述が思い出されます。11世紀後半の院政が始まる前の状態を説明したのですが、**政治は摂関家に任せ、天皇自身は、外からは窺い知れぬところで、ありがたい存在**でいらっしゃいました。

このスタイルは**戦前の昭和天皇**まで続き、そのもとでは国民に直接理解を求める必要はなかった。それを**大きく変えたのが、ご高齢になっても被災者を見舞い、戦没者を慰霊すること**を続けられた**平成の天皇**でしょう。

平成から令和の天皇は、「幽玄の境」を踏み出して国民に寄り添い、**天皇という存在に対する国民の合意と共感を培う努力**をされてきました。

今後もその方針を続けるのであれば、**旧皇族男子から養子を迎えるなどより、今おられる方々を活かすことが大事**。これまで全力で公務を務めてこられた**女性皇族が宮家を存続できず、新たに迎えた男性がそれを担うのは、国民から見て違和感**があるのではないのでしょうか。具体的に**どう養子を取るのか手続きも疑問**です。

皇位継承は**自然でシンプルでわかりやすい「直系・長子」を優先とすればよく、女性皇族が公務だけのために「使い捨て」にされないようにすることが重要**です。自然な形で女性皇族に皇室に残っていただくには、**「女性宮家の創設」と「夫・子も皇族に」をセットで実現するしかない**。ただし、**皇室全体の構成や皇族の絶対数等を勘案して、男女を問わず皇籍を離れる選択肢も柔軟に**考えるべきです。

歴史上、様々な危機や変化を乗り越えて続いてきた天皇制は、**今日の事情に即した改変**が加わったとしても、**それを受け入れて活かすだけの十分な力を持った仕組み**だと思います。

【プロフィール】

本郷恵子（ほんごう・けいこ）／1960年生まれ、東京都出身。**東京大学史料編纂所中世史料部教授**。『院政 天皇と上皇の日本史』（講談社）など著書多数。

※週刊ポスト 2025年6月27日・7月4日号